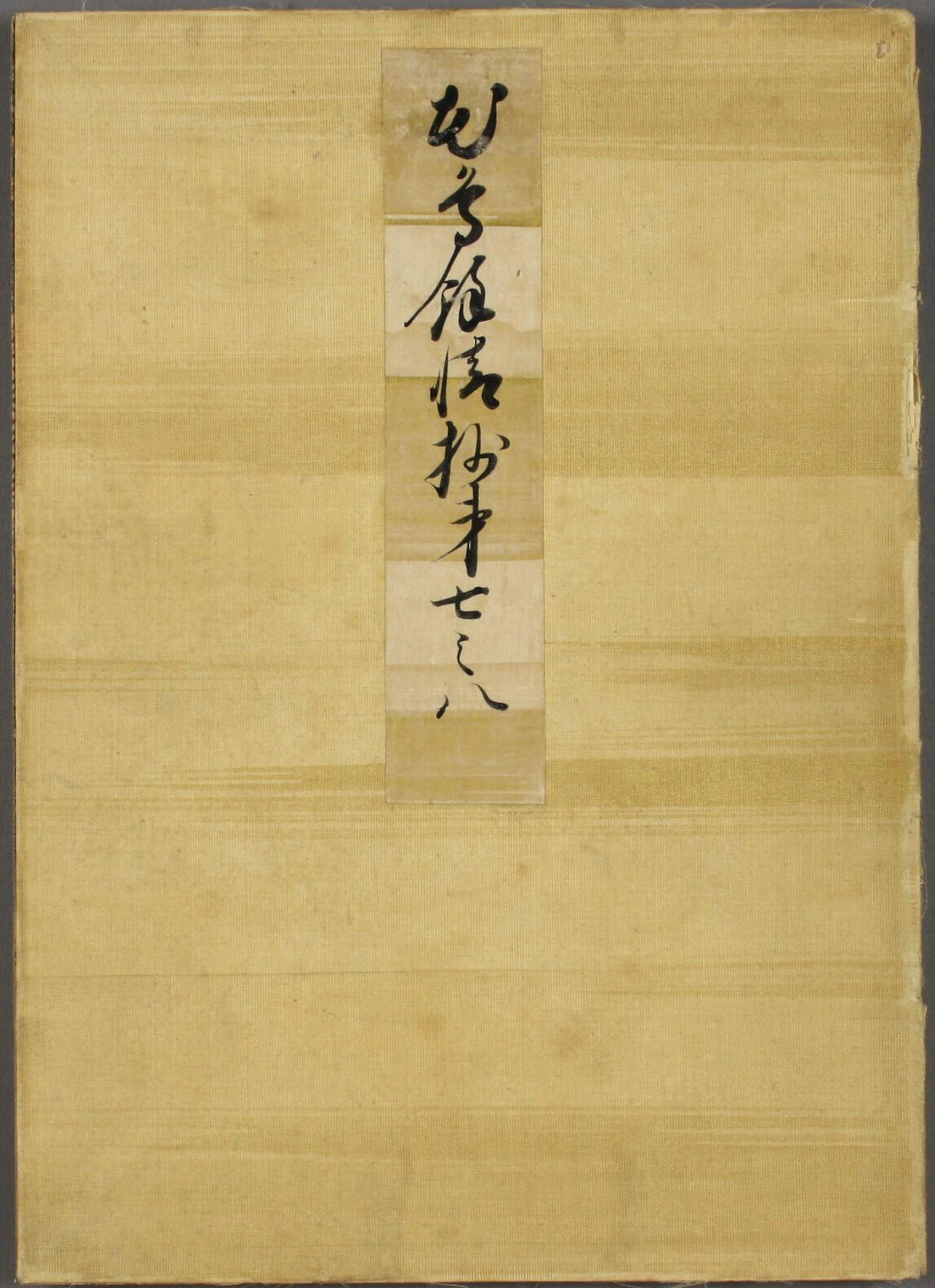


むすめ情抄本七八



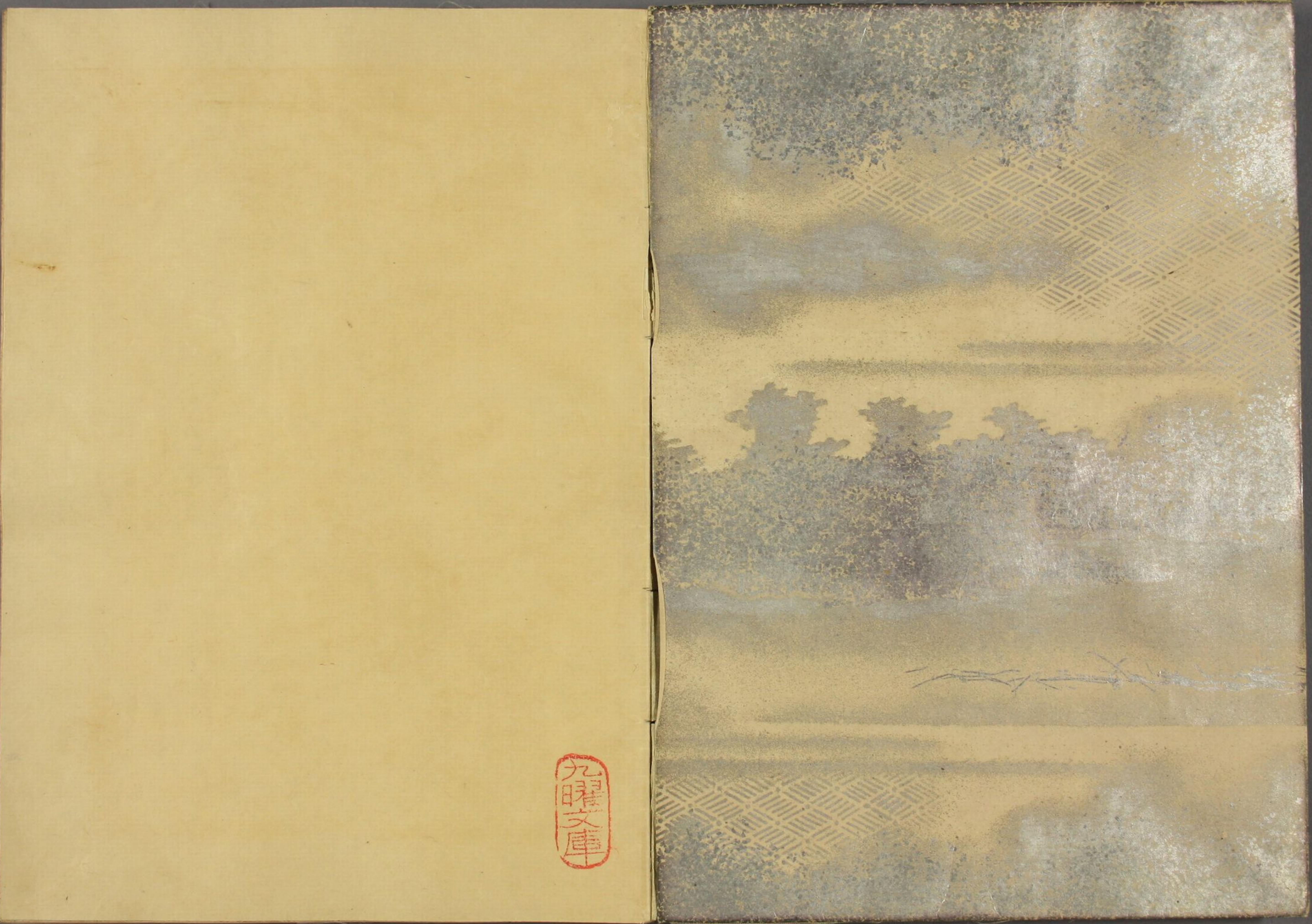
80 9 8 7 6 5 4 3 2 1 2

70 1

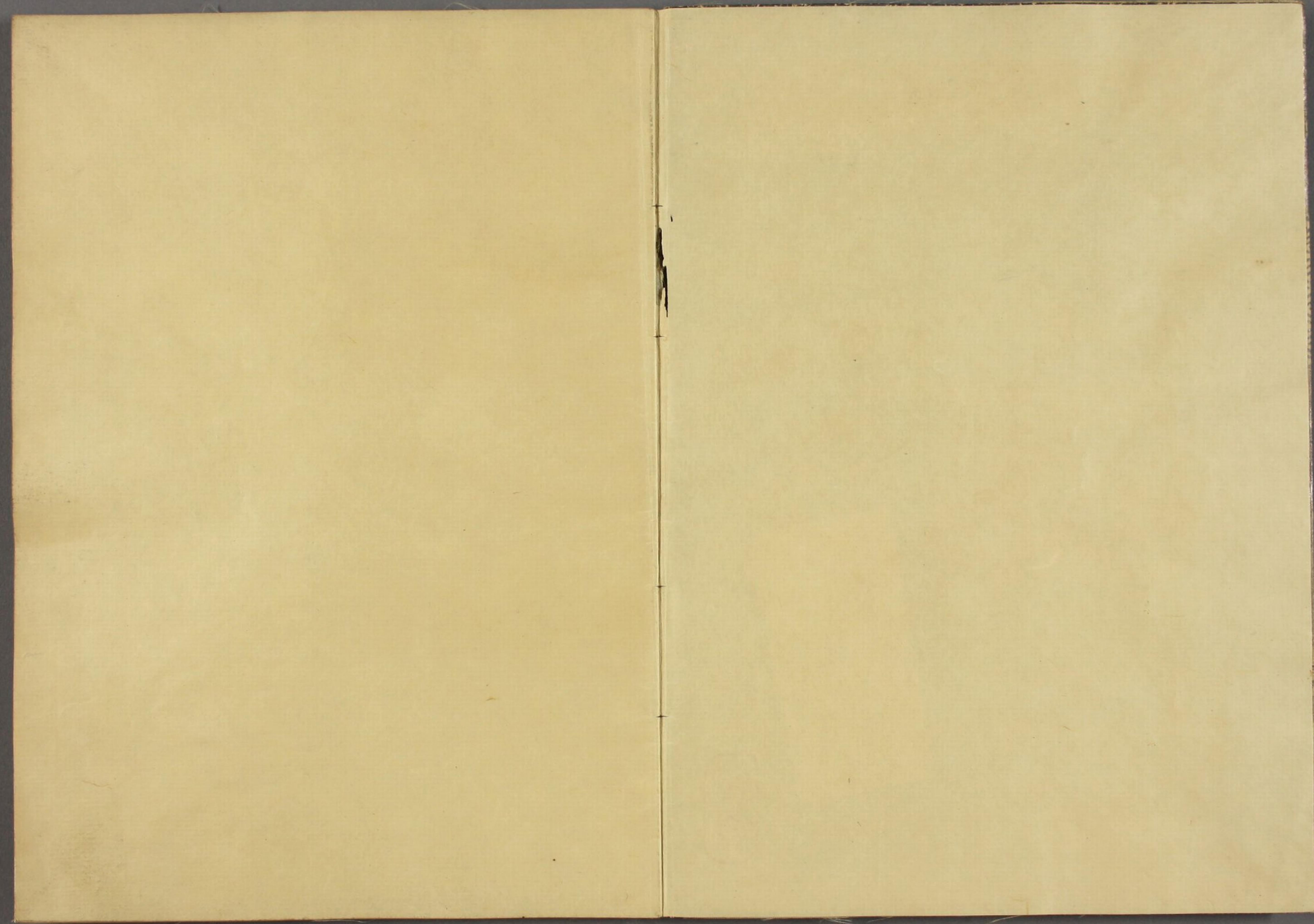
5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

60 9 8 7 6 5 4 3 2 1

6 7 8 9 10 1 2 3 4



九曜文庫



花鳥餘情草七 賢木 花散里

七賢木

コトハヲヨヒ

以詞及歌為卷首之世事ノハニナケ年此
本行り源氏廿二葉の九月よりすば
歲乃又生てれ本とう菊行

ひくみちう思ひう行

ひくみちう思ひう行

ひやうひくみちう行例へゆき有りなす行

あれと

村上の浦女親子内歎至天延三年秋

ムスメイリコノミエヒコニ

えよめりてト向へ給ふ御母微ハコニサ
室明親シキアマラヒシコモミヤストヨロうもくくさり行ア仕レ
内宿シタスよ六家山基カミと微ハコニサモア
レシタクナリテシテイ母モトム
みあひうきト向シタスの例シタストモトモ
てくじうあく

れりのぬめハ

六家山基の御母

そやく御ミタスまくいあ

御ミタス是アリのゆのあり

えのくちけんうらはんハシ人ヒトまくわ
延喜式ヨウギシテ大賞オノザシ文垣モンガキ也ハシ植業シツセイる垣カギト
一又イチイタウより東支ヒタチの跡シカモアシもあき

准ジキと毛モー

久納木クダマのも升

久納木クダマは川カワもすモスあ波アハヘー
海シマの次シマ流アマツと用ヨウ白シロ

毛モー

火炬カキ小コトブニ人ヒトあり山城ヤマシロの國クニ高野タカノ郊コヨ
の秦氏タケニ火童ワカツ也ハシトシトシ延喜式ヨウギ

又そあり

あうひやまく

上の祠うらはやくもわゆるむれ神

とあり

うあうのほよもとてあ行く

こアハヤマウハマハ寒よあえのは、

せよととあり

宿便

聖教書集

らやす秋山の林もすれぬもううり
辰巳ねねむきまくつづくぬむらのえ

宿便

とひよつうそめん廻也

三秋未晚之候立夜将明之天引緒
依之之情虫声切々恨遭逢斯時

とひよつうそめん廻也

曉の別をうる寝けませあすな秋の色ふ

朝源

あゆきのあはくはゆくとて仰き御すやま
太底當時心愁苦就中腸断是秋天
わうあさゆあらまひとむりへや

とゆるや

水原抄りかくくらゆる坐ひ

アストロ
ミ

アストコロ

北清さうりんあつたますひくに
まらえみよのわきとはりえ
あまくよきはれいわくのれの別もか
うきよしてりありすを難御
とものうの地りかまくらもつる
おこゑのゆでりを思ひ乃乃やふ
とつうあくりほのあくらうと

く御きらむてゆりねまくら
えれくゆくのうとう

よのくを例あくらう

ややうもくらう縁半く上ノトモホ

十六日拂もくを一行

サイウラニヤハリカタニヤカニメキラニスツ
亦宣辭行の日ハ西川ナリ内裡の

革あり船ノ船中中臣拂麻
あくはるまある

らやくふくし耶と

近江中九東内親王臨行預定監送
使參議一人或以中納言充之 年一人史一人六
位下官人一人西宮記云大臣着陣定

御前大中納言各一人參政二人正位人
勅使中納言參議各一人宣位六人長達
使中納言若衆議寺史中勢議右一人
已上奏聞下外記こと仰式部

今葉辞行の日御前と勅使より原まで
て候すと申歸奉寸長奉送使く侍
間もとひそひそてまうてよめも時
う備收りとみく事ゆき御下る
内と奏すとれどきこへれ
そぞく藏本もと傳御事

行まもと一き御事アモ

宣年詞樹畏

侍と内と申御なれと清ノ多リ有利文
ノ内と女別あつてお宿了
アモさりと元りうち御是あはく清
基不内と申事とこそそえひりを
アモ女別あくせつとすがえの女別
あい近表承よみやう

やうて御うよめりたつてつても
承主のうなづかますすく田丸

母のことを嘆うかのまゝの東
高の下にありありと母をもて
ちるくはり絶えぬにて 因興トクヨ
ゆくとすむと切まつり事の時母
宿の帰因興ある例トクガラシと
きやゆうの葱ソウス風華フウカ
のめいじてひとりれすとみす
てうちくらと印興インコのし林シノと是も
祚事ツシのとくへんうゆくゆうや主上シミツヤ
拂ハラハラの行幸キヤウガラ或シヨ法社ヒヤの行幸キヤウとに
と見るまひけふ

年ミサにとんを経ミタマの御忌ミタマの十日よ
てこまうアツアツはく十七八年やそ
秋このひ中えとまづけ行つて女
車リておがよもれ絶ハラハラほびのゑ
十二月ミツヅチの年ミサ朱雀院ミツツカニの三場ミツバウくゆ

氏の歳の時よりは、東洋の
事より多くてあゆみの中
保明太ヤスアキラと小一京丸セイジンマルとの例へ
みて仰かへども、この如きの
行はれりと、わざりあり、
もろもろ行はれり

主儀御王西川リ出立よと
うゆで天皇八有リ者一にて
大極殿の様房小安ぬりやつま
てきの御衣とねもて鼎ノ内装
東ヨ以テ大極殿リ出立
即座内東ノ御宿リんじ
手引よ御中間御麻をそそぐ
ふま内御内ス佐美人余モ
て御玉糸つゝと仰ヒ奇ミ
乃即ウハ御内門ト大極殿
内壇上リて喫もうサリて御内
小の内とあらわの内ト着なよ
御とひいとのらう大唐衣同
次の裏とき経りのうとけ経

ひりあきにひりてもあまとも
ゑ女房ル様とよすけんに時
ハ御乳母ミツメと見て産テヤシと看テヤシ
天皇スカニと称スルと二聲ツボシう皆ミツメ又納ミツメす般位
かすみつまで中臣トミヒル忌部ミツメと名ミツメを支
此次ソクジ身ミツメと見て御帶ミツメとよす
又作ハヌの角ハナタケとミツメあミツメ此次ソクジの御
内ミツメ宮ミツメとミツメすミツメ人ミツメ以ミツメ内ミツメ仰ミツメす
すミツメより行ミツメ包ミツメうミツメとミツメとミツメの時
御主ミツメ御前ミツメアツミミツメ女房ル様ミツメを
シテ御作ミツメと天皇ミツメ宮ミツメ入ミツメ御ミツメと
ゆき御ミツメ御主ミツメ額ミツメ行ミツメてゑ
クミツメとミツメし未ミツメ御ミツメ年ミツメ行ミツメと
シミツメとミツメゆ約ミツメえとミツメ御ミツメとミツメ
とミツメとミツメひ大極ミツメ收ミツメの東ミツメあミツメア
門ミツメあミツメ御ミツメ物ミツメ作ミツメ送ミツメ御ミツメ少ミツメとミツメ其
きとミツメ約ミツメけりミツメ件ミツメ擇ミツメが人ミツメ
作物ミツメ不ミツメりミツメ作ミツメ黄楊ミツメ木ミツメてミツメ川

くじじあつまえす許金銀をくわぬと
まきあしもとむろ方アオサガサよ入セ
多カ領官にて清ひいのと撤
あこの名アシテゆき

八省アシテつをあつて車

大抵數とハ八省院とスニ八省と
ソアハ八省のむだなる歴朱雀門志
内一町アリ南限冷泉小浪中山門
東ハ京ノ坊城西ハ而ノ仲城と
まく也八省の東よ太政官廳西

豊玉院少アリ中和院ハあかく車モ
八省の玉院アリテツモツモアシテ

二院院もうとあんの大路アリ珍経
程。院アリモアリ

寺玉家興出昭訓門至八省東路南
行至郁芳門路東折至卷福門南
行即出東掖門往ニ得大沙東行
至京極洞院大路ハ西洞院と
東洞院とツツキ主子ゆき木
ケ木よアシテかうり

もうまくかま候つゝと山て入りて
くともあまうへるうりあてなうめとす
一木舟ゆうとやむち

やうまなとまらうとつゝ
やあくまかとひくゆつめに作も
りとくはよき

せんぐくさんぐく

ぬづくせんぐく

洋佐とひくゆつめに作も
よのまくはよきをけふ

佐とひくゆつめに作も
室乃郎附へ後くのせりの連序

おほきゆくひくゆつめに

ニキ右大臣ミスダジヤ太政大臣ヒトシヒサシ赴入ヒテシた大臣ヒトシ
元慶ヒタチ正年三月右大臣基ヒトシ修公ヒスコウ任ヒタシ太

政大臣ミナモトノトヅル越ヒタチた大臣ヒトシ源轉ヒラタ例ヒタチ

えそひくゆつめに作も

えそひくゆつめに作も

えほくゆくひくゆつめに

せうもくみゆきの事は思ひ合ひてぬけと
ゆうれんとすがりまへつきますと
なあせゆめりもひ

天下謡詞事

しょくまよもて
琵琶行云 門前零落鞍馬稀

まじよこの物のつうかみくす
とあくまみれと御幸とりいり入
ちも幸あれとあそびにますり及
す

まじてんのひしれもすげうすれ
まううりあ

登卒敏トツシキ弘徽ヒラヒ敏ミタキのゆより梅童メイドウに又
さよるぬのゆよりゆりとよも耶ヤら
ゆき殿ヒヤド金ヒヤドひりぬもよとひくヒク一月人

をとすすむヒテひりぬもよとひくヒク

もくつづきにさんまゆゆきいたりも
あひりもれ

正行ヨウキ承院セイイニおえ若オエ内ナカニ親チク王者ワラ依ヨリ世ヨリ次ヨリ

簡定カンドウ諸サクナ女ガ王ヲ丈スミ之ミ

今來ばやひのあいに至る已はの事と
例りむ来て延喜以後の事といひする
事か近きゆうけり殊もノア院ノミ立
行すハ穆ニサミ真ニサモ也れば、是志
例り取次ガリモアストニモ是

ノミシテ

日下記ニシテ、未てまことをあらわ
せめり

モセキセキモセキモ

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

モト

シテシテシテシテシテシテシテシテ
西宮大將儀云宿申本大將ノ下サね以止
宿候之中至其上臘取申之殿上及モ
候御前令次將殿上人申宿申官人候
由即大將於射場殿及使所令申即乍宣
与集初同多曾申仰云与之其音似ヒセ
北山羽林抄云宿申亥時た陳久刻夜
行セ寅刻右陳勤之モ刻物而一人申宿

申候由 ノシタヨシテ 殿上及宿所易
上萬次將在中之

今夜宿申の近侍よりの夜大内次將
の内侍との升もる上首の人にとひて
申て敵上りても又直床カニロゆくもかし
大内侍あり宿水シコラにて是中夕シヨウ
て下野シモツキの大内ありしきにうとゆゑて
近衛官人官姓名ミエイシヨウメイとす大將ヒサシマツより
よりと作そよりは假シマツのまゆふすとい
ぬくやや々シマツシマツもあれり不即シマツ今内
物語シマツシマツとよもあつみてうへゆきも
えりてあゆんシマツシマツとこの井中のをゑん
トキアゲ待シマツシマツのまちうりくこゝれり
久須古シマツシマツまくわくこころゆくあまくわ
程シマツシマツ一右近シマツシマツを有
申てこゝ時源氏シマツシマツも大内シマツシマツのせうれ
きくわくく只シマツシマツ行シマツシマツ
人シマツシマツと被シマツシマツゆくとあどゆうとよつまと
あくとよづかひやのあくとよゆくと
あつてゆきと人シマツシマツとあくとよゆくと
本シマツシマツがこれシマツシマツとゆすゆゆか

とやされどもあつたせりうゆ
見ゆ

あきけはくよつてせやひねりてまつとも
しれうらうわとよ

そよぐさんの中のゆきとめひがる
義者收女房も朱雀院の中今上の
母文の明るの卷りちんとみくい
をうらうるとれえ

やくまにけくとりはうれりきみ
み人のゆづく

うちつやのやえでゆすく

おおむかとゆうすますたり

うと

はくらゑとせうつやとの御まこと院
へぬりもくらはくこうしす

よほきやん

サトキ

わくらゑとせうつやとくやくやくん

わくらゑとせうつやとくやくやくん

わくらゑとせうつやとくやくやくん

威丈人ハ漢高祖ノ章趙王如意母也
惠帝の好みてありしと立つて人也セ
レモは計の事あればくする祀
八崩カウ一絶カイ恵帝位をつきゆくのち呂
大后カウのじくいそんとて歎ヤキ丈人カウ
眼カウとれて人ヒト衆ヒトツとて歎ヤキ丈人カウ
中ミよをミこミとミまミあミり
ふ人ヒトきんヒトの國クニアリヘアリすもモ
と落つての中ミえの大オきミきミるを

とされ候由也

印シキ部ア

沙アハシテうみかみられはまゝやうに
さうきまゝ一哉れよりハカラカ未ミとて
えけわのまミとどりトヤ

雲林院シラタケイアヨヒテ落アリ

國史云天長九年四月登圓寶駕幸紫
野院御釣臺院同獻命陪徒文人賊
詩御製和成賜祿有堯新撰院名焉
雲林亭美和十一年八月癸巳幸北野

駐蹕於雲林院。因覽池塘。賜宴群臣。日暮還宮。元慶八年九月十日丁卯。權僧正法下大和尚位遍照。奏言雲林院者。故無品常康親王之舊居也。親王出家為沙門。貞觀十一年二月十六日以此院付屬遍照。曰深草天皇詔。此居天皇。曾露常康落髮。是天國極德。獨難報恩願。永為精舍。令天台之放休。思え慶寺。永賜幸勿度者。三人傳天台之法門。試度之道。請以詔。當勅依請聽之。

元慶寺別院。成親王之心願。院中雜事。選擇遍昭門徒。中堪幹事者。令其勾當。勅依請聽之。

番論義也

ひしろんき
ひしろんき

かわらの秋をもすみれ
寺院にあまうゆくゆく

東院へまづおひすらうとひかとあれ
ひしとよりかうるまくわ

およ

かのあみみのにて

林よつよたうあるえ

ちうきせりとせり

寺の祠あそ一里リ不考ハス

お

きてあきらむ移しまさりまん

ほくわへゆくもとさすよほの

寺りきゆけれ

あやくゆのゆく神へうやくうも

アミミナリおきれ

あ御うやのゆくゆくしけじれ

物とよらうなりようほのうなれ

神とうしゆゆうとあやまと

つづたちへ伊勢莫衣をよしおの

れ月へ舟えりぬくうりいとつづ

ひまへ又舟院の御車にうづめ

神とうらゆす

うき仰うまく

西宮折え
重服ム彌奈黒達車
と葉孫周
又弓門の即事よ主歌也

西宮折え
と案諒周
又は門の即事よ言眼
さううつとあり」と
りふくらむとれやうよ
アセ修よけととくアシキキマア
申えれ東を宣へまくアセ修
社のひづき、かうものあアシ
もみじの木アリちじゆく木としもじに
すれづれ

まことにあはれはまづ絶了
中えりあさきの御ごとく退御
日ゆふの志ゆアアアアア
そこうりぬけぬきぬけぬけ
見とげぬきはアアアアア
白ぬりぬけぬきぬきぬき
うひうひうひうひうひう
とくとくとくとくとくとく
すずすずすずすずす
すずすずすずすずす

おしのゆよひゆすれりまくとす
ひそくゆきつもてうそりしれ
うれりあへてゆるも行つても
下乃ほの声をすりきこむか
といひあらじれすりそつれ
アヨされとあらもゆれりまく
くとまくとと

おおめうり

まくあまてうるとよせん
わの上にうれむ

んかまくまくたまうれもとのと

まく

文部省立家守本

人まくひまくいふやぬとかくまくまく
高柳じのまくいふやまくまくまくまくまく

とまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまく

故院圓圓の山佛

口被ふまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

ひあ前もすりゆまとくまくらうア
ハ行セ一いぬきとれひお見とけア
一もえんはようとうの済セもちのねをす
くみあきこ行け、

のねもセ一りまとあえの行セ一
半と女院行セ一アマリモリと東
入り東えの仰仗アと大やねにセア
トヤモ行つまし

月夜とじ雲みとけくまよみかねよねまし
源氏のうやまの山の中とくしまく

てよと行つまくわ山と東えをも

拂まご

うふうつ

きの用あつて一弱

アモ、ううかまもくうこりれやふ

謡周シヤウもすみてまやあつ一未やつ

もく

りひりわせて

又あひうきは

えつとねくわくとれあつても おも

湯たぬきもかみすわくわいゆ
と成るにせど

わがくらゆきほうの男りとく
か階と金き年勞を以てのく
とつと三えの年爵とソノ院ノ御行
をこれアホ

たのゆくをねりや本とくをもんてり也
のあくまぬゆくむりとくをりれ
をとてまづ治

内官仕事チシムいた大臣藤良世寛平八

年十二月廿九日上表ミツテウタフテニス仕セナ十四太政大臣
在実サヨヨリ安和二年正月八日上表セナ仕セナ七十
七等ヨリヨリの例ヒトツ今れや後アフタの打ハタハタ中ミ併
て良ヨシせの例ヒトツひきうなり又清慎セイジン慢ミ
公コウ内官チシムの表ヒガフとてまづて八月廿三日同ドウ熱院セラヒ受ヒテ禪ミツの時ヒメよ舊コトハシナより
引ハサウ入スルのをもけ奉スルり内官チシム一ヒコてみ
とつとよ冷泉院クモリヒ受ヒテ禪ミツの時ヒメ核政コトハシナより
内官チシムは核コトハシナ内シナ内官チシムの例ヒトツうち
内シナや又内官チシムとつとよもさうり

てお仕事も未だもつてこの方へ
打めり車とも人祖ノ廟ノ
ふ車ノりあれニ懸車ケニコヤの卦ヨ
宿ノ辞ジとツツも猶故セイま
まよありリあらま
ひゆノちかニまニか
マ

卷之三

之れも源氏の君の事
わくやれとこのりとれ

そ、たゞま
のうへ

それともとをさしもまう動かすが如き、白い壁など
のものだけは、つねに引かれ、あく

はひのゑと元はくもくもく

時よりてひづるをあらはすよしをよしとれ
そよほゆのむかわせ

カタハラ

うすとこしたすへどれふるを——う
きとのりまてえとひつをつめか
きこくふせ紀事キワシヨウもつひ——ますや
たすくひゑもれてやそもよ続ひふ
ういてのりまてとくのありひく
アソボもそのじゆくすれもよ
あれともねうろ——うゆもよと
とくふく

文王ブンノミコトの武ムサシのゆユとくらむく行ハシムを
仰アツムすアタマアタマアタマアタマアタマアタマの
おふくらオフクラまさんと仰アツムせられしれを

うわくウワクかよん

文王ブンノミコトの武ムサシの力カタとアシテ事ヒサシの
曾コロの世家セイカア周シラコラの自稱ジセイの詞ヒトヒ
なりこれと後江相エチエイシヤウの自信セイシなる核政
と稱シテる表エイの詞ヒトヒ周シラコラ公コウ且カシバ
文ブンもシみ武ムサシの力カタ自シテ知ル其ヒ貴スミ忠シラムニ仁ミツ
者ハシラコラ皇カミ后ヒメノミコト又タチ皇帝カミコウ之ノ祖ヨコソ世セイ推スル其ヒ仁ミツ
源ミツコラ氏シテの君ヒメノミコトけりのアシテ人ヒトアガハ
み朱雀院スザクエンの御ミサマオアシテすスル木キ田タケシ公コウ

よけでこへ一と通じゆせ成る
かうよのゆくさんせひけるもそ
とは周室のと位のりゆくべ
あり武志志は成るの位ノ川
さうされにえのくをねらへる
てゆく朱雀院の院徒院徒のととの
位ノけよ行つまうちなは朱雀
院の次よ御才の冷泉院の位ノつ
き終て相馬相馬とあらわすとうて
御主のすくこのゆくさんと
と上の御意とぞりこきとぞくんか
アサリゆくとあらう初
うすくあるふうか
源氏の御事御事なれぬ衣衣の邊
かひきりゆくとおもむくとうのやく
まぬきて
あれと内訳のと御事と大まか
うとくよこ
ひとうゆくとおもむくとさかとゆくと
れとくよくと

三のつまうりり（木）あらわすとんす
ぬきのうり（木）居居のゆゑ

八
天散里

かねる春名す木のまにぬくせす
のまくは春を同ねのまとうる
津ゆくことゆゑ

花なまのまへ

き一うみゆくむうかりう

あらわし（が）まよみうや川にての
まくえもゆのゑのまくはう；
ア、いゆくはまくはう；

ひづき

をうちうすとよきぬ御みあひに 痘のほの
とうちうすニ万葉ミ百千返タカリ
はくのふカク

大武のじとうやれど原のあい行ハ
人にはまづ寒ヒヤクす
うきけもらくウキケモラクみとミトて
うちうすニとし赤カシカや木キもモれ
大タカとトる

はハあやつアヤツのノや
中川ナガワのノなナう

うウのノとト被ヒたタすスおオれ
あくさうりアクサウリ

是シテよりヒ源氏ハタケのノとト也

みミてテうりウリうせウセうれ

うウのノ脚カフのノまマは源氏ハタケのノとト也

あアまマすスく

今イマあアれレ宿スルねネとトわハまマすスく
女メ脚カフのノ可カく

うウすスてテうウ。

三ミのノのノすスゆユまマまマまマ

人れきと称也

中川のやれ事へ

花鳥餘情集八

隈廣 明石

九 次磨

以秋子詞為寒若深氏大又歌之月
廿余日ノ次磨海ノ源若行ノ内
シカノ女云泉ノウツモク世參ノ
アラモリ

シカモニヒノトム人志ミテサムカ
アリタレ

深氏大又ノシカノ源若ノキニ
ナリトヨリハ平中納ミタリ

主下つやへと用ひ且ひニ叔也遣
りあ東征す。幸とくは要了
してうそりはまことを悉相あ。宣のた
大臣の太寧府に在廷す。被詔相公
の陰波の玉へんううせ。例とりく、
あり又併周ふ。先へ橋六れ四
翁居す。いううり主へのやう。一
ふうて寧府へり。り。り。り。
を行アされれど。うあ。うあ。
亦物語りはううきり。お。お。お。

よ文主ひみ武主ひか。海民の自稱
ち。因ひ止りとのまとあらわゆる
化粧へ

ひくすりん

叩へ金きりか。ひくすりん

三月廿日あまうれり。うんもやこひる

往行も

西宮たお。安和二年三月廿六日大

途太寧府

主下つやへのう

聖居せりんのり人出ありとぞうと
のとよまつたゆくはひのをとそ
てもりまく隱居のりと申れ
三月のとくにえりくとつれん物
あわやもくわや

あうれ下とさりけりわくとも

うちかのゆ宿あめの下とさりま
あくまく車もありとありへや
又日下記ノ神功皇后 三韓

と征ノ時新羅王れりい高詞
リ東のは更りぬもう出阿礼那記
り乃さりまよナリ神川ノ石のり
あ星とあんこうハ拂り失わと
退船ととどす車ありこれみるま
一き車乃車もとあきうれ川も
あさまの因りあらわのる
行ふとあととくとく隠居くよ車
あうかがりこくわくあらまくわれ

官位とくのうまく仕位の今

お車といふは源氏も深石ちやうじ
よりて玉文のきやべーと来てまよわ
すうち水流を人とかわすうえ
深石もお車と深石もうすりあ
水流も神々とむりそれも飛の
柱もいとうすこ歸の深石きた
近の例と用ひて

うゑと

うゑのよればうゑのうゑ

ときゆうと

あひのうかま

美えよかとせひうゑ

美の事りにさんとまれてえ併まれ

とよむ

ほもううみつらうりゆうね

あひのうへばくますせあくくも

りゆうとくは

うくまきんとくまのうすせつ

うくまきんのうすせつ

身死キトニヨリキ人アリシカヌモキ
初モトニテアリトミク

ナリムルヒ體ムマシヤトウハタクシテシテナリ
ナリヘ山ノ體トウビノシテス

アリルツメレヘテシノミハシナリ

江文通エイモン別賦ワカノフ

黓無エニシナシ銷シス魂者モコトノハシマハ唯別而已矣

ラサヤミナウヒナリ

一平サホミナモアヒタリシトモハ同達
ハモシシニヤハシムトシナシ

身いさんもとが人ハナリモテ
人いさんを取トアリアリシトハナリ
人れおりシト塵モシテ

身今アホシヨツキモシテシルアム

第ノアホシ行つるナリワシヌキ
文集モノガタリセ母志シメシ君シム又傳シテの志シメアリ
てシテシル後アフタシテアリ母シメハの後アフタシ

シテシル

往いづ月のアホシヨツキモシテシル

シル

ニ系のえりせうゆ時中納まひ
もれりあ日の月れひり思ふ
アモアムレツリウア例の月の入
シトソトソトよるく

文集うふく

自樂天の詩賦とあり共に七十二卷
り行長慶集とソア長慶年中ア
あくまゆを

りけあはるはれ

定義のけ初とすてよりゆ

内大臣家の百首

まくら底うなづ小咲かく月うかる

脚高まアヤアヤと

山と山陵とつや

命ぬと人まうゆうと

藤つりの中あ、出都のうと幸まア
やうととアヤアヤと、朱雀院
の母名ともちいづくの母名をと大
えとヤウリヌヌもとすうそアリ大のま
とくぐりこの中ア朱雀院の母名

ノリモ室を后支と申ゆり

浦又のやこの花とさんけうなるとあく

ものや、春宮とまへ行つて

まくらをかねておもひやうまくらをうます

まくらをかねておもひやうまくらをうます

時あくまできて

うれしやうへ

いはて入てゆき

こころてまくらよ

脚もくわせ

世ゆきうわひ

けうり日だ云 わえりたのゆくあ

まれぬまくらへゆくあうく

ゆきうあめくえ

ゆきうへ動くゆき

大に敵とひきうれしくあわく

母と京の時候歌とおで大わびと

ておほきにむじよして歌歌してゆく

あくま七日よおのの歌石づくゆく

月に入京一月すくぬくおもひたるの身

ぬの時の旅館なりせりねりも
仰りせらる也

了圓は處處のうちもゆきをもあらん
に海ノ、此乃屋原、は潭よりそれ
一竿ばかりとあらざれりこのほ、流
形とすりあり一人今いやうたすわ

ニ奈よだくまき野々と入道えとアリ

キモルクにまんす

レシテのうつのうのうの物さりの

ヒシヘアリヤアレレシテのうる
のセキトヨマテ

ね鴎のあまでぬゆきをあんとぬれり、今がうひ

ねよめあしへ道あはれりゆあ、あ、あれ

はあれにてつらきとぬれてあきやん

のアアアアアアアアアアアアアアアア

みくへぬうてえん

ゑすくはりうひの内みまもて是て、ま

うまとくまうああああああああああ

かて、うういへ思ひあんとあらすのあらす

ラ、あれらとのまことやわんと

ふれり下の一般へ通まとはばとの声

うひのまへたりひものまへどもうり
おもやもとてうけつまく

おもよみそをねむるがすまきのとしひ
三日ゆと役のまうそうすまう羽せな

をえのそやあうそうう

浦やよよだよじしあれくあう櫛よよこそかに
はせ風とくくゆ煙のあくはうそまくそがき
とまほ撫のうとあうてようや

源氏ゑれう

ううぬうのみうねうさば塩あわやつぶん
上うみえり

とのゑう絆つまぬき

二本院もうとまく源氏ゑれ衣^{アマ}え

てとううおつとわのまうとまく
中くうううのゆれけろやわん

み乃道とこのみうとけゆうりわわん
脚本

あまのもの今まで

まはゆうすとつせ

ゆみゆめめのく

奇富の佛縁きてすまわすと

飛鳥ノミ

あもれと思まそ一人と一うう一空
や

あひらのす

ま世よりありよるるのつひときこもん

よる人々の中に人々の祠すらう

をり御門のまことにとく内侍の

みかえとくみゆ

もうやつまつゆうまがんとく行

朱雀院のひまくせりあんとおは

えりからむかきのままとく行

内侍のまれ殿とく行と御門の

ひめり者ゆくへゆく行

うの人の力われと思つてう神

と御ゆく行ゆく

行平の中納言のせきくわくゆつひあん

うきよ

さく

天廣御時屏風寄忠見

続石今集行久もとぬくはあすけゆき

時ゆひのう中納言行平

接金をゆくゆよう國吹こゆかまく風

今案実吹こゆとよ羽のたえ平と行
平うととあうもと奥入及併行^{ヨコハタ}
独宣うととそりゆりつ形この地詔
のととの国吹こゆとひがん浦源

とどる忠見の被のうむれとあい
かゆり旅人へぬとゆ一色や
うめうめ平のうあかうりうてか見
うと思ううりうめ平うとつむ
やと那推とくみ人ゆうゆうのす
き漢家本胡の書ういづこわくす
ゆよ死志の姫彦うまくす
細ねほりやううう
まくとううううううううううう

ゆう

白樂天詩

遺愛寺鐘歌一枕聽

れどもかうにうり
波^ハ川^カあきらめや白^{シロ}いわのうみ
ソラモホシテノカウミ
ゆふのあくまぬ

せぬ人あり。かくは
ほきのふとえり。かくは
あり。凡れ速き事也。

白海ノヨリ
あきあや乃御
衣紫荒
也の指^{サニ}
費^{ヌキ}とれど
私^{シテ}あり
ナリ又もとんみた
ゆか
御衣也
乞^シともいひ人ノ相^シて
あらう

は多くとくにやまゆりこまや
あか跡もとへぬひ正義地も平納の
を文そとわき也。レミモニ田辛
詮ノトモテモモウカナナリた田うる
タハシモトニマヤナリ

ノクヨモキモソウムホラウトドリ

内ノ子

鳳櫓カニとぞの居の志をいづろをす

ノ角人ゆきらウとともゆめす

ノアシヒタタタタタタタタタタタ

こよへ仙境セキヨとぞま秋の、ももも
き、もとて常世ヒトハはつをう病ヒトハも
固志せしむれもすりもじもなれ

ノアシヒタタタタタタタタタタタ

ももとくすりもじの羽ヒタチも
て考コトヒタチ

ノアシヒタタタタタタタタタタタ

紙シとくもとくもじとすりもじの風ヒタチも

ノアシヒタタタタタタタタタタタ

人道えの幣やるもはうとの物ひへ程よ
神サヤキのまくわみうの祀
めうさうれく

あけまきの奉りもあやしくとうせ
なまつて内もり

うくわくへてまくく音のうり

あれを林の奉りあきす

ゆくお拂うも御方もまじこもいす

朱雀院の拂門の原成り拂う行る

幸せんとみえあずあれまことの
うりばうひてぬきり いまく
りそなまをもとづつてよあじよ
ひひますく

きてみ節のまへ

ス節の志の大卦の女東りてほめよわ
ひぐれ散室の奉りみす
ゆてめりこよりつてうんむけり
吉空相いやもあらじよのたまう
対してまくわにくとほりまう

や力弱の者もあれば
またうつりの如きの者とて
ちらとまわるゆゑなくやむ

玉脇秀之 胡の因ゆき

五
收
春
胡
因
乃
王
不
嫁
七
事

もすりぬるにあつては
とやうの遠いへんを
のまとうにそぞり
のつゝいぢれすきと
およ思ふ

わが心つゝそひ
まこと思

あ
の
い
ひ
む
か
う
る

日引代りやまとの大蛇タツノの事チをうけ
八ハと、八ハの者アリといふゆけ
蔓ハシ延ハシナガニ字シマツといひとよす
けりとれどもいそぎてれあ
くわづクワズはとぬり又アフミ

میخانه

苦痛也

もろううりとつゆまふも

伊勢や浪打ヨリミみと幸余圓の中

とあり故圓と云ふも

御つをうせんの内トヤ

ありのすむねてくらうそきこゆ
よ故がの特姓スジヤシの内と云ふも
すい行つや

おもひをまのむきよ極ヨハシうすまくま
もしきをまはるあまや極ヨハシうすまく

山ううまのゆううのきよやうなうりわと
もひのううきよくらまくらゆうりまく

ゆうえくらまちあはれひへりゆう
せいしんとてゆうじけくまうにうと

とくまでひらり衣裳ヒヤウの着ぬあうと
ゆうえくらまのきくらうりともうえう

とあくとあとをくはくとまうえう
やうゆうえのきくらうりともう
えうくらむ井イの黄カツラかくと
まうねうすうと善清行法華深紅

衣服卷議云但陵紅桂黃赤乃火色
者不在制限シヨウリミツ
黄白不許也カイホウスギヤウセキ
乃半之白山ハナヒロヤマ黃衣カイ之沈文シヨウモンともれ
ありアリあやまちアヤマチやうすヤウス一イチあらアラ
ひづりヒヅリ赤カとあるトアリ地ジ
きとすキトスきわキワくとクトもとモト也ヤ
ふいゆフイユきえキエ

わ
じ
り
け
ど
く
さ
イ
ハ
ラ

行
叶
一
侯
馬
系
之
于
之
也

蒙古文

لهم إنا نسألك ملائكة حنونا
لهم إنا نسألك ملائكة حنونا

身のまゝの如き

ハラテ
カナヘ
タマシ
セキ

月廿日よりは陸と又不^レりこもりく
え微之^{シテ}和^シま^シ時川^{シテ}か^シ詩^シ
白い^{シテ}と^{シテ}三^シ住^シの中^シわ^シ連^シ
のうれ^{シテ}身^{シテ}思^{シテ}う^{シテ}る^{シテ}も^シ
あ^{シテ}よ^{シテ}らし^{シテ}お^{シテ}け^{シテ}い^{シテ}ゆ^{シテ}定^{シテ}家^{シテ}

連すよもうわひの施れ歟をへくまくさうき
雪らくもひすやでりそなれま日吹うてり
三位中ぬとありそくもくもくわせ

あらはまな被れ成うけはまかとあと忘つ
めりあそひうながくとソ泊りす、せ
きとみをせうり又けとくくよ

うるすりはくまく下支の宿

あとうけ被れとくはすんと、風も吹きまわ
やすまほくゆくと大仲宣

しきやあれり今しよゆうとあらやあや
うみゆすてぬととひこよりそく草下や
うりいりみくら

道成集 女院の前で雪のひろ
うてゆりーーーれとくとゆ作
まある

ゆどよをすゆとくすとくすとくすと
定家口 四月記ニ 雨脚融地電光張合
そくーりつ物りなんうもあへす人
そくあへす

大津宮みそぞうのあ源もとたゞ
りそよわつてひあそ河ともなむ
もれすれもん敵もゆくつま
みうちあらんみかづくわく
うみ中のれきくとひき物うそもわく
れい度少出見すと源氏のあした
えくお神の豊玉姫とあそせぐま
けしとあく入道のサトキズを
あけつゝ

十 明石

心事専祠為奉源氏の家業の三月
十三日よは磨りあつたりはひ志
後させ歲の七月ぬゑのすきてニ
年のまみく
ちふれ内やすす神うりそもて
三月一日より日また日まで重風がすす
吹うりそくこれひりそくとぬくれば
幸なり同の成のじに因スルカガヨ
篠叔素叔といひ一諸度周公且と

もこれよりして周公東都シラコシトヲト

シラコシトヲト

居り年

二年うの秋天大ア雷電カニて風吹

あくもくえを走大木の根カニる

多ア成モウノ時全膝ヒザの事ハシとハシの事ハシ

ひきみね用公ヒテシラとワラシツ不^レ功行シ

てりうとうとくまとそとくもゆふ

の時風カニ走りてやくわくとく

くたき大あくまとくもみゆく

のくまとくあれマシテれシテあシテ周公

とニ叔シテの港ハシとくは如シテの信シテお

いと天カニいりとあくゆカニく

乃思シテうゆシテ行シテりて草木

のくにうやうやくほびシテあと

周公旦シテあけシテ十三日シテての風

風カニ走シテ也

うそて耶シテアんゆシテよくゆシテ

えもくて

師シテ内シテ大臣シテ伴周シテ公シテ播磨シテ國シテうりてれ

ちえむシテうりシテ御シテのりシテくぬシテあ

ひまシテうきシテかのくシテ罪シテとく

ウリ太寧行タケルノシキア葉丸

物語りみすう

まじきだゆう、まゆう

そもれ春ハナモモりまゆう

まくまく

風ウラジロ吹き半と室の流れや
雨順風潤ウラジロとよみ月ヒツヅクの廿十日
毎時エイジとゆくとすまトスマとせのすよ計カウて
をの流れハラフミとよ

あゆきとよ

みのるときとるおとよ

みちひりて

笠日記カハラノニキ

むりのちひりて春のゆきとよ

あれうきうけうりうりけ

うきうけうり厚タマいすこりもんり

きらうり

ええうり

くううううやむやむの向うカミカミて

みくいぬうりぐく

とくに奉りあつてゆき波の事

山をばらまきります

野に寒風ありぬアリ

をもすこゝからアリ

まうかみりしとれぬまと利

往者ノ御舟ハ往來ノ舟ヒ

故ニ神功皇后新羅トモアケヌ

アル帶ノ船入道ル事トモア

約莫ナリ石やき風りスル事トモ

ナ下よもよりあらひの事トモ

ナリの御舟ヨリ行つサヘアヒ

ムハ御感アリ

ていとれども窓ノ御ふれはま

りて

長恨歌云養在深閨人未識
詞もとことづり意い貞觀政要も
オーフ

くわきわ人足りはまち井ト

すハ

えれよりは深川の志代祈禱の越より上り
以てもほとあくひそちりまつる人
人々うんとよ

届けのうあらかとうとまくぞ

ま跡王記承平元年十一月七日始壞清涼
殿南一向因去幸畠震改造せ其東行

南廊及屬校書殿廈同以造

御ます御多きよやうすらややあひよさく

住吉

の神ハ此のそらしきの小テノ

立ちよりうしひ出でゆる神ナリ

よりあぬトキ才神トモト作リ又海
の中れ神モよ頬とてにまよト上よ
河走れども神とつんトリ相違
あきききやうやのやけあひへが葉ラ
志代又見下さリヘモのハ百モト
ハリもやうやうまうやハ百争ヒ
ゆき

まく

うの國の字ナリトキヒキト
あらんなり

久みうつううにさりへやう
長恨寺よ方士う楊支紀ととくは
のまよよ上ハ碧落下ハ影泉やつ

月夕やのまきくくして
月夕やはの巻くもあ
ゆうりゆうあひしりすりて
うきよあしの入道のサリんけぬ
ゆとへたゆるすとうしりすりよ
ひよの巻くもあやくすく

うじまく人ひくとくにまく
うきゆようゆゆゆくとくよ
はゆのまくとゆのめとけをうじ
さんじくとくとくや銀力のり
ゑむきくとくとくとくとくとく
ふ事アタリてへせアモコアキよ
のうか

これでやつて今又まくよこ、奴

ぬまうとすこひうせはまうと
住め、人又時の權門もくわつます
ういたすとあきとくよきいんじの
の入たもほくうひもひアはり
る人あれ、もう申すりへそく、
ううくまく

ううくまくこくまくとくとく
このううくまくは住と辞しカトううく
ウアムム今之とせとことと早下し
て今之とくよアソク

ううくまくあくアソク
橋磨國風ちひえ難波高津りえび海時
明石の彈家^{タカミ}弓^ミ弾升^{テイシキ}の木と
てお^ノけうせの舟力わくや未幸
ううくまく一^ハセナ^ハくまくよ
てくやむとせくふとくりを朝夕に
のあくうて沸食^{ヒツク}とは^一沸升^{ヒツキ}の
水と色あつてのみおうがくとくとも
きてうつ時人あくうとくう
住め、人又のうとくとくともさきや

今葉あくまうるさく
シテ風太記のんすみア
まいとくれ

この春の暮のそば
けとまつ木の花
まつ木の花

ナラ
ナカリ

林之子

アリのあつ回

月のえとてみえとて

ゆいわく

لـ

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

いはるのうらほりの春
ゆふ花とさくらの木
ゆふのまつりかきよ

おまえの仕事は、おまえの仕事だ

せとひきわく

勤経ゴヨウりうてゆきわいゆ

あそみあらめのよこのうくさうとうと
躬恆ツコトの河アマハはぬくのすれあり
みくもぬれ入アマスルの面マスクに湖カチの
内シキの出アマツる日ヒに記メモを湖カチの
内シキの出アマツる日ヒに記メモを湖カチの

かねとよと

廣陵散クサラタシの秘曲ヒキョクに龜康カイカラの花陽カマヤの
亭テイにてとく神人ミコトよあじてつゝ曲ツツク

は神人ミコトの伶倫リヨンリの変化ハナハラ

信養ヤウはゆ

こ多ミツ六度トキのりはせ

入道琵琶ノドヘビりけ跡トキりきて

既シテむしてありけ跡トキてあ時ヒテ入アマ日ヒ
のトキ小右記コウジ云ヒテ琵琶ヘビ法師ハササギ令コムサノ藝エイ
給タダサ禄ロクを寛和元年カニワ七月十八日

そくとあらうとくまほマホのひくまほマホ
ひたとくまほマホのひくまほマホなま

次にさういふからだつたうけ
りてあつれりあひ

は一時、わが家の傍の家々のすゝれ
りのうえをうきよへて、
時節とよなれまくはれたりあらむ
うるさくもひきのまづけしきあらむ
人間めやひわくよらく
いもひらきまつもみゆきめ
すくいきつまくわくもま
すくいきつまくわくもま

まほ車いの馬のうりてし
不うまうれわの称しむれ
多うとすきんすう
あゆくまよひけんす
のせんじれ沖てり、じしてり
あとのへなれ草マラシト、延ヨシ古ヤハの席シテ
もうてこ代タメりをりわとせてもり
きくまうはあ、れの草の上半アツハな
ふうと入道スリのうりあくませんすと
い延ヨシ古ヤハの席シテと申

山中ひいゝやうにね風とまつて

やあん

革もくまのわらをそんにまつて

ふれとまそそづゆひれ

壽喜は師 拾遺作

ね風もあなげつてまども思ひ

志とぬとまきつねすうきわら。

ほどの思ひすやあつて入道もし

めもこれりの上もとてひくはもて

とくまうまむらうりく歌ひ

きげりまはくしらむくをく

ぬよとむとくの河り山すくむむく

ね風もくまとくとくとくの壽喜は師

うの詞とくとくてうくはくもまへ行

きくとく

あまく人かゆにくたゞもゆりこまつて

やとく今くれむくまんぬくとくに稱を

いまとくじりん

文集の群毛川へ日玉てひまくは

列の司馬刀ある時ノキノ源氏ト

又とぬのありこまうおつむかうれもむ
ほあう、の民見ひくやあき人の
うるわゆへありましまくわすと
玉天とソニ也あしの令り、とそや
一きあふ人りたゞくや行ア上よ
ノ革シガラの革をひてえれり又明るのと
ひ群毛アも運一もうりとやゆ
そめうみ人々とひかうりあ
群トとひこすねわらうのアリ
面白くまき野シマカ

いそあすりうさん
こちもうじたゞしきむじこあす
くたゞみうみゅうひくづく
ひくづくにまなませう
へひくづくひをひくび又革をひ
あひもくき行つと
のゆふうとまくら
由ノもいたゞよりてものとゆます
こえ続り上をもくのあくまく
れもくまくしうてこえらうへ行を

源氏の志乃は、柏原のまゝてみひ行
と入ら来てもとひきり、ゆ失
てまともあらずや

ひすゑ井ノ地

穀の字、愁殺懨殺シラナツナラサツ、
よしをもとへて、ゆへて、災志井うすと
よもよけとあくとせよ

わのとくけなうす、時うすを
よのうじとじとじとを

かくつもあくのものばと、
着葉の春りゆうすれりうきや
とくらくにれり、うすい、
すとありむる人のものとをよせ
れとぞ

せうき、神ノ木ノ木ノ木ノ木ノ木

後朱産院じまわ枝て一木

そりの木の神、やまと、ようど、とよとよん
日しづこひとくに事と

思ひやまく、おのたゆうまく、おとづれせよ

おこな

人をもてまつて
風の匂いをもてまつて
風の匂いをもてまつて
風の匂いをもてまつて
風の匂いをもてまつて

もとは根
のものよりたこ

れどもうされどもとくに身方し
てともうも煙草トニカク禁煙ト
多々蓑ハ外ノミナリ其物

さへりて、せりぞうめの文を
通乃に事、まことにすと
よもやあとまやしゆくやうやく
はやくとよすくゆく
じ
益額和尙寺

ゆすめぬわざと神のありせむまほのめくよむとくま

を時々とひてよせ

のりじいとひてよせ
ゆきつまとまなうみのくにりとお
ゆうじとちうれらき、のせりとゆる
むと見ゆくとくき、みり
うれりあれとへ道りきへり、
きありこりひのうめおつとうと
すとおつんとひと思くうめおつとうと
ゆうりとおとくうひもとへ道
きうとくや

あくうとひとくうじとくうじ
おとくう源とくうひとくうの者りとえ
きうう

とくんじうせやくよふくわ人のまうやせん
ゆくまくわくのひくわくのまうやせん一鹿
と葉除けのうせのぬうめり一鹿の
ゆうめりとくわよけりぬくわとくわ
くわぬめりまとくわとくわとくわ
とくわぬめりまとくわとくわとくわ

三
ふくのくわ

三月十三日みちうむじめそ

あれもよきしやくすこ東りもゆうやく
故院の御門へゆゑよとくつる

即ちひづれひがゆ

朱雀院のゆきうひ筆を之筆玉を
即位のは即筆、即ちあくあくの筆
と思ふゆきうされ、政部のえ方の筆す
まう又寛等供奉、筆とあり
はくすりてことりし人とまほんとく
よじくわくつゆまれん

令書獄令云九流移人全配所六載以
後聽社即本紀不應流而特配流者三
載以後聽社 今至流移の人々の流
罪ちとめてる人を云ふれ、六年の後
久役引と云ふすとゆううて流飛の
ことりくよもとくか人をもとゆり記流と
きてる、三年からは云うますをゆりさ
うて塗れせられゆり記流と
ち十の年も云うてお仕あつき

故三年とてりもくにくとくとく
敵シヤニ也ありき敵シヤハ虎ヒツジの形
とくらうみてせのかと免タマをゆとく
又大敵シヤ非ジヤ都ミヤ敵シヤは
虎ヒツジのき敵シヤのそく物モノすく
とくくゆくとくとく人主ヒトシナ也
もくけこく本ハラあれハラ却ハラリ敵シヤ乎
ゆや源氏ハラフサノ志三年とすとくわを敵
矣ハラフサアリてハラフサモ津ツ門モン内ナカ
みひうちまわう下ハラリゆは徒三年代

文シヤと川シヤりいあやまうせ立刑ハラウ中シヤよ
徒罪ハラトシテ徒ハラ奴ハラ人ヒトとくによし
あせんハラけよと立刑ハラウ有ハラミ
ほりうちや一年も三年ま
て役ハラリそく事ハラあると徒ハラ一ハラが至
徒三年とくつこ

よりとりてもくすく月

せアニモリタウとよ、もつこく又人
ひき、まきりまとせこりのとくまれも
ニ系ハラウねア時代のこりつ耶ハラリ

うきよとあるせす

お家のうちつあつんとくすみとくは日
のしきとまひ拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂拂

うきよと

やうえと未とく

りうれの万葉ノ新夜^{アタラコ}と又格夜
とそきり格^{アタラコ}じてとつりわ
うん年のねきうえ

居そしもひきとてあもしもじもねくねむる

とくの教のりやと黙まこ

はづれあづれのたぐらをききやう
をあめう

立教つるを教派^{アシテ}りうきともれ

とありうりとうりひり入道^{アシテ}は

氏と川導^{アシテ}すすりはまとうきはる

とよしほばりこのえくらうりア筋
絆と思ふんひけりうきうはうり

あけうりとよくまとよくまと
もううちひきとくとくのうへこれ

んとうときあらひうそうけぬ

そのやいそ、あんねむる
くまかねての國とけ井
すくわうすくには下のやせと
にそび

けねへりうきよれうらとあけゆる
えだもれ

きうと四ひそでなきよりあはせのやうに
あひきゆのとくづや

まのまことあをゆく思ひなすと

よす

じゆう

女うらもくうらとくは ほねコラテラ り脚候
とやまかくととくみぬかすくお

よす

ものうひまつまわるのことや

人のゆうひまつまわせととくまくま
ともやん“偏死ハサイ”のアリあわふね
計すううなくもやこのうへもく併
いさうううんともひやううんとけ

卷之三

あやしくてアヌミー、うよホリは京
でモルヒノイわゆりゆき、けう失
のみうちあひのくのそ

其後又得一
人名曰
王仲尼

えへと二家のゑれの色
うきよはまくわせとねりのまくわく
ねりのゆめまくわくねりのゆめ
あくらむあくらむ
らきやうじんのくわくまくわく
をくく浦 らきやうじんのくわくまくわく

アヒルの鳴き声をうるさくする

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事
アヒルの鳴き声をうるさいと云ふ事

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

アヒルの鳴き声

か納すれあうててまくにゆくと先
の事

か納えも良清ヨシキヨまほ夕納すとま
のそううりそう

わまとくらうりそうゆ

ほ氏君アサヒひは日政氣チキありまよ

まきうてあまくへとむき今いひのうとく
れつうてひうてありうてしゆくたけ
くくく

一玉の琴クサリうめうめうめうめうめ

くよめうてこくのとくとくとくとくとく

とく

あまたてひきにらまくすうとせうてひくひく
中々とこえうたすうてひきとくとく
絶みのとくとく

みゆきうるうれうすうひんと
ひじそれくふれくらうわくうけ
てとくゆくとくりこくねく
ゑくいもくうもくああい

うんとよひや

うららかくはなむせき、浦原のあづやをひひや
うららかくはなみ陽氣ナガチのうめをす

うららかまやあれく、良のうめやうだくま
うのわいとおれこよめやとあ

うれほのうめとく、タスモウカヒ

うれほのうめとく

うれほのうめとく、サルアレトモ

うれほのうめとく、シマツキヨモニ

ほく氏のせり、石持と打まつて
うる人今に、金の浦をこし

行へる波打くと、波の人の心を
あわや、あわうとゆくとゆくとゆく

うれほのうめとく、旅衣リョウイをもるのとく

うれほのうめとく、旅衣リョウイをもるのとく

うれほのうめとく、浦うめとく

みりそぞうとくとくとく

うれほのうめとくとくとく

このまゝとまゝせりきこひま
おれとよすけ

おれとよすけ

こゑくらあむ行つ

うんそもうわのあくうとま

ひえいもといとく神

そとのみゆくしゆとくねうすとせ

わくよ一日のやまとくすくうすかゆ

あをあへれのありま

わくよ

おゆく人石延とは六載つり出山
平佐ノ叙とく寂幼の佐よりひ
叙もつけたり但この佐以上とく養
て別勅とくまれに時子とくの
まちにえようてくのを
官初から仕りひりあひとくせこ
みゆのな佐りうすあひとくせこ
くろくくせじよのちぬうれいすれ
もうた官佐りあひたすりてくのそ
權大助をりあひだ

すりの權大納言ありま
職負令大納言二人を令の文代て
此三人の事へすよりけられて格の
事とくつ余や寛平遣誠も大納
え勿過權ふ二人に達誠の心もと
人のうちり權官ありゆく心へりき
あらなのりとつまし格乃言
くつべきりよるく除氏も格乃言
とされまゆ中止りと大納言
正一人持十人立らう

まわるまきゆめきひはあくまじ年りよ
一立よひ立てられとあり一ノ立人
うあきわゆりひひじくモ蛭みり足
たれまことあすこちまく日辛記り
むるみとわのふりのそくもくりと
仰きとされねらぐりとある化され
きてのんとへつてはくことゆうといん
とそりのとへつてはくことゆうといん
ソラモリ海ノ根國(うみのね)とゆ
けのまえ鳴まくのまくとゆうて

蒙古文

まくらかすあひるはきへりまのうじたま
太神宮造物ノ事と古故と見る
あれとされモサ一年とてひづる
とゆきわすりて御^{ミタマ}トナリヤ
えくわくあよとつ河^{ミヨク}行^{ミヨク}先^{ミヨク}
ちくの日^{ミテ}に伊夢^{イサ}詰^{ヨリサ}伊夢^{イサ}冊^{ミコト}
天の御柱と大^{ミラ}て一つ面でりう
あまよりあまいのすとまくら
さくらあま申^{ミタマ}つゝ^{ミタマ}やり^{ミタマ}れ
うめあたぬきとほくろもあまや
うりりかくハ春^{ヤホト}穀^{トコロ}とくにえを
よほほとソヒモヤシ^{ミタマ}人年
わ遠^{ミタマ}あり^{ミタマ}キ^{ミタマ}リヤ
うめうめ^{ミタマ}て御^{ミタマ}け^{ミタマ}ス
くとくの人民^{ミタマ}リヤ
くのものうちいり
あまとあまは是^{ミタマ}とほのもとあとん
けもとあたゆまきめりを人と見ひすね

あらねのわ事へ人れうきとくに
りやとへりへりとそくらるるやく
のうしとまうきよせ

个まわゆ是は失へるをもて
わ思えしつとひあらうとつりもく
けは思と今もひまされまゆり
下ほ氏のまわゆうつるみまつと
きてはうなづか

まくまくつうてうとせう
お院アキマカヒトスリトスリ

とあらうとやうあみのとわく小
つすてひはまあるあうすりまく
みのとまくとめれとまくとまく
まくはくとまくとまくとまく
ゆうひ日記アキマラマレとみ
のとまくとまくとまくとまく
れ志アキマラマレとまくとまく
えすりんアキマラマレとまくとまく
すりんアキマラマレとまくとまく
文のけひんアキマラマレとまくと

まくらもくらひらうすり 似てうとつ
はのづまじあぬうすり すゑうもうすりあ
とそれもつとむやうけりをくわ

アラシロトト

あすかくわせきり もち石城よ 神のひくろと

後撰

さうよ三浦は日暮のあまに 神のひくろと
今来とせきしめうとほとつと 橋櫻
のくとくくようくうくくくせき
うらやせまへとくぬの浦ようすく
立節の志のあとくくくくくく二志

不都かりーキと、うなりよ思へ

内道

